

# ヘーゲルとハイデガーにおける ユダヤ人と民族の共生の問題

景山洋平（東京大学）

# 『黒ノート』のユダヤ像について何を問うか

## ◎ 本発表であつかわない論点

- ◆ 「ユダヤ人組織」の存在史上の直接の意義(計算etc.)  
→ トラヴニが既に検討／ユダヤ論を深める気があるか？

## ◎ 本発表であつかう論点

- ◆ 存在史と「凡庸」なユダヤ像が接続される事実の本質  
→ 存在の思索そのものの暗部を反省するチャンス
- ◆ 対決される形而上学(ヘーゲル)におけるユダヤ像  
→ 形而上学の完成形態・形而上学的な近代国家概念における「ユダヤ人」を踏まえることは必須の前提
- ◆ 存在の思索の負の側面を『黒ノート』に則して概観した上で、民族と共生の問題を肯定的に捉える可能性  
→ ハイデガーに内在的な論点に加えて、形而上学の遺産(『法の哲学』など)に則して論点を分節化できる

# 『キリスト教』のユダヤ像とハイデガー

## ◎ 『キリスト教』のユダヤ像

### (1) 形而上学的な自己完成の対立者

◆ ユダヤ＝傾向性と法則の分裂 ⇔ キリスト＝愛の合一

◆ ユダヤ民族の分裂：元初の自然的合一からの分離

→ 「無限な客観」としての「神」を自らに対峙させる

→ 神の「律法」への喜びも幸福もない隷属

◆ 絶対者の分裂と統合という基本図式の一部

→ ハイデガーの「人間」は「動物」に《対して》際だてられる

### (2) 地盤喪失的な悪の運命に囚われた民族

◆ 法則から逸脱しうる運命的な罪業に己を閉じ込める

◆ ギリシア悲劇のカタルシスがない「マクベス」的民族

→ 『黒ノート』のユダヤ = 存在忘却的「人間存在の種類」

→ 一致点：自己の現実との和解のために対置される者

# 『法の哲学』のユダヤ像とハイデガー

## ◎ 『法の哲学』のユダヤ像

### (1) 道徳から人倫への移行と政教分離

→ 無規定な自律性が、共同体の具体的善に止揚される

→ 宗教の内面性と世俗国家の公共性の位相的区別

### (2) 政教分離の文脈でユダヤ人の「同化」が語られる

→ 改宗せずとも市民権は与えるべき：宗教的寛容

→ 市民社会と国家に馴染む世俗的な「同化」

## ◎ 「同化」の問題点 = 形式的平等における差別の伏在

### (1) 世俗領域の分離：内面に固執する虚しさの自覚

→ 世俗領域を形成できるのは多数派の宗教（新教・旧教）

→ 少数派への違和感が未成熟や頑さとして表象される

### (2) 市民社会の他の矛盾によるルサンチマンと接続

→ 帝国主義（「計算高さ」）と民族主義（「人種原理」）へ

# 『黒ノート』における存在史とユダヤ像

## (1) 存在史の構造とユダヤ像に関する研究の現状

- ・ テキスト上の事実: 二つの始原の記述構造との連関
  - ➡ 形而上学の「自己絶滅」から、「別なる始原」へ
  - ➡ ユダヤ人のユダヤ人に対する闘争と自己絶滅
- ・ 現時点の先行解釈: 始原の語りの問題性
  - ➡ トラヴニ: 「作為機構」と「別なる始原」の二項対立の有無で、反ユダヤ主義を線引きできる
  - ➡ ナンシー: 始原の語りは、形而上学の伝統的な「自己憎悪」に接続する。

## (2) 形而上学「批判」に内在的な困難ではないか？

- ・ 根ざすべきものの語り ➡ テロスを現前させてしまう
- ・ 現前性の批判 ➡ 自己絶滅の尖端の空疎な始原
- ・ 空疎な始原の対立者 ➡ 「凡庸」なユダヤ像

# 存在の思索の「我々」の問題点

## ◎ 事実性に定位する意義 = 状況を引き受ける責任

### (1) 『存在と時間』の良心論の責任(SZ 288)

「呼び声を了解しつつ、現存在は、もつとも固有の自己を、  
選びとられた存在可能に基づいて、己の内で行動させる。  
そうしてのみ現存在は責任をもちえる。」

### (2) 「脱去」の自覚後の責任の記述(EHD, 40)

「神々を名指す語は、常に、そうした呼び掛けへの答えで  
ある。この答えは [...] 運命の責任から湧き上がる。」

## ◎ 責任の《重み》の源泉が、無責任さの根拠に反転する

- ・ 元来の脱去 → 存在と存在者の図式的分離でない
- ・ 対象化されると → 存在者の否定でしかなくなる
- ・ 応答すべき現実の《重み》と存在者的状況の分離  
→ いかなる状況に対しても《無差別》となる

# 存在の思索の「我々」の積極的側面(1)

(1) 反復すべき経験は具体的にはいかなるものか

◆「脱去」の経験 → 人間の根源的有限性への直面

・「痛み」 → 形而上学の歴史の終極＝技術時代  
→ 『法の哲学』に伏在するさまざまな社会的矛盾を包摂する技術時代の危機的状況(※ 解放者も共犯者となる)

→ ユダヤ人も危機の当事者

(2) 《対立者》を創作しない反復のあり方

◆ 有限性の受容 → 有限性の語りを託しあうこと

・ 「痛み」との可能な和解 = 「痛み」の場の世代継承

・ 当事者の現前を超えうる第一のもの = 言葉

◆ ハイデガーの後期言語論の可能性

・ 人間：ロゴスに応答する「記号」／「対話」する「民族」 7

## 存在の思索の「我々」の積極的側面(2)

### (3) 存在者的な状況へのコミットメントの問題

- ・ 何らかの理念を目がけて現実を制作することではない
- ・ 有限性の伝承 → ニヒリズムにおいて可能な未来の開放性の感覚

### ・ 言語的伝承から「準備(Vorbereitung)」の概念へ

- 「痛み」の場であっても、これを継承する者が決して途絶えないように、現前する存在者的状況と「交渉」する

### (4) 存在者的な「状況」に関わる態度の性質

- ・ 『法の哲学』との関係 → 軋轢の解決を求めない
- 軋轢の当事者が誰も「絶滅」しないことを求める

※ 「翻訳」の失敗を超えて、世俗国家と宗教が互いに余地を与えあう柔軟な関係性

◆ 「我々」 = 有限性の伝承において新しく紡がれるもの 8